

# 近代都市における同業者町の変遷

——道修町の制度と主体——

網 島 聖

## はじめに

本稿は近世の都市中心部にみられた在来的な職縁と地域性の関係が近代にどのように引き継がれ、また変化したのかを都市地理学的観点から検討するものである。これにより、近世―近代移行期について共同課題である「積層する都市の歴史性」を説明することを目指す。

近代都市の中心部にみられる職縁、特に商業と地域性の結びつきについては、かつて同業者町に注目する都市地理学的研究によって検討が加えられた。同業者町研究に端緒をつけた辻田右左男<sup>①</sup>は、研究の枠組みを文化景観論的に個々の異同を検討するものと位置づけるにとどまったが、谷岡武雄<sup>②</sup>や藤本利治<sup>③</sup>はこれを不十分として、同業者町を動態的な地域性の把握を通じて確認できる職業上に現れた地域性の問題として検討し、商工業者の制度や社会性に注目した議論を展開した。

しかし、一九七〇年代以降、近世都市の地理学研究は絵図を用いた景観復原研究に関心を寄せ、都市形態論へと論点を集中していった。このため、近世の職縁と地域性の関係が近代にどう引き継がれたのかといった論点については十分検討がなされてこなかったといえる。近世城下町の研究では、都市形態に注目した都市プランの析出が盛

んに行われ、その中で地域制への関心もみられたが、地域を構成する商工業者の存在や彼らが共有した制度への言及は十分でない。また、これらの研究には都市の社会史、経済史的側面への関心が比較的希望であったことも指摘されている<sup>④</sup>。

これに対して、近世都市史研究の「仲間」に関する研究では、職縁と地域性の結びつきに関する検討をより精緻化している。今井修平は官による仲間維持の他律的側面ばかりではなく、重なり合う存在として株仲間の前段階に自律的同業仲間が存在したとして、町と並行的に存在する仲間の意義を主張した<sup>⑤</sup>。武谷嘉之は近世都市における共同体のあり方という視角から、町との対比で議論を展開する<sup>⑥</sup>。また、井戸田史子は都市支配の枠組みとして作られた町に対して、別に市場の枠組みが存在したとする重層的構造も指摘している<sup>⑦</sup>。以上のような論点は、より近年の都市の分節構造に注目した近世都市社会史の論点とも重なるように思われる。これらは近世都市の町方社会に形成された対目的分節構造が近代におけるヘゲモニー構造の前提となることを指摘し、ヘゲモニー主体である問屋をはじめとした営業者やその集団を分析の主眼とするからである<sup>⑧</sup>。

こうした近世都市に見られた職縁と地域性の結びつきは、近代の都市においてはどうなったのであろうか。この点を検討する上で、大阪を事例とした一部の商業史、経済史研究が参考になる。宮本又次や藤田貞一郎<sup>⑨⑩</sup>による研究は、株仲間から同業組合への継承と発展をとらえる視点を持ち、近世における職縁と地域性の結びつきが形を変えつつも一部は継承されたことを示唆するからである。ただし、明治以降は営業の自由や移動の自由が保障されていること<sup>⑪</sup>から、居住地制限を課し得た近世都市の地域性が近代都市にもそのまま継承されたとは考えにくい。都市内部の商工業者の社会的関係や彼らが共有した経済的制度の中で、具体的にどのようなように都市の地域性が近世から近代に継承されたのかについては説明すべき課題が数多く残されているといえよう。

以上を踏まえ、本稿は薬種商の同業者町である大阪北船場・道修町を事例とし、同業者町が幕末から明治期に経

験した変遷を制度と主体に注目して明らかにすることを目的とする。制度については薬事法規、同業組合制度との関わりを重視する。また、主体については株仲間、同業組合の名簿類や商工名鑑類から得られた個別業者の立地を地籍図等の大縮尺図に反映することで、主体の職縁と地域性の関係を検証するという手法をとる。また、検討対象には、近世―近代移行期の大阪（大坂）道修町を中心とした地域を設定する。道修町は大阪市東区（現中央区）に位置し、河川や運河で囲まれた船場と呼ばれる中心業務地区の一角を占めており、既往の同業者町研究において、その代表例と目されてきた（図1）。また、類例を見ないほど、株仲間の文書史料から近代の同業組合文書史料まで、一貫して豊富な史資料が保存されていることから、本稿の目的を達成する上で格好の事例と位置付けうるからである。<sup>12)</sup>

なお、道修町における近代以降の薬品製造業について若干付言しておく。近世における薬品は主に和漢の薬種と、これらを各地で独自の方法で配合する家伝薬「合薬」が一般的であり、道修町で取引されたのは専ら薬種であり、組織的に最終製品である「合薬」を製造することはなかった。<sup>13)</sup>明治以降、「合薬」は売薬と称され、国家的な薬事制度の中でも区別されていくことから、本稿では検討対象を薬種および医薬品にかぎり、「合薬」および売薬には言及しない。

## 第一章 近世における薬種商同業者町・道修町の形成と発展

### 第一節 道修町薬種商同業者町の形成

ここでは、既往の研究成果<sup>14)</sup>によって、薬種商同業者町である道修町の形成過程と近世において果たした薬種流通上の機能とを確認しておく。近世大坂の薬種業は幕藩体制下の唐薬種貿易との密接な関係により特徴づけられる。近世を通じて唐薬種は中国からの貴重で高価な輸入品であったため、その流通は時の政治体制による管理下におか

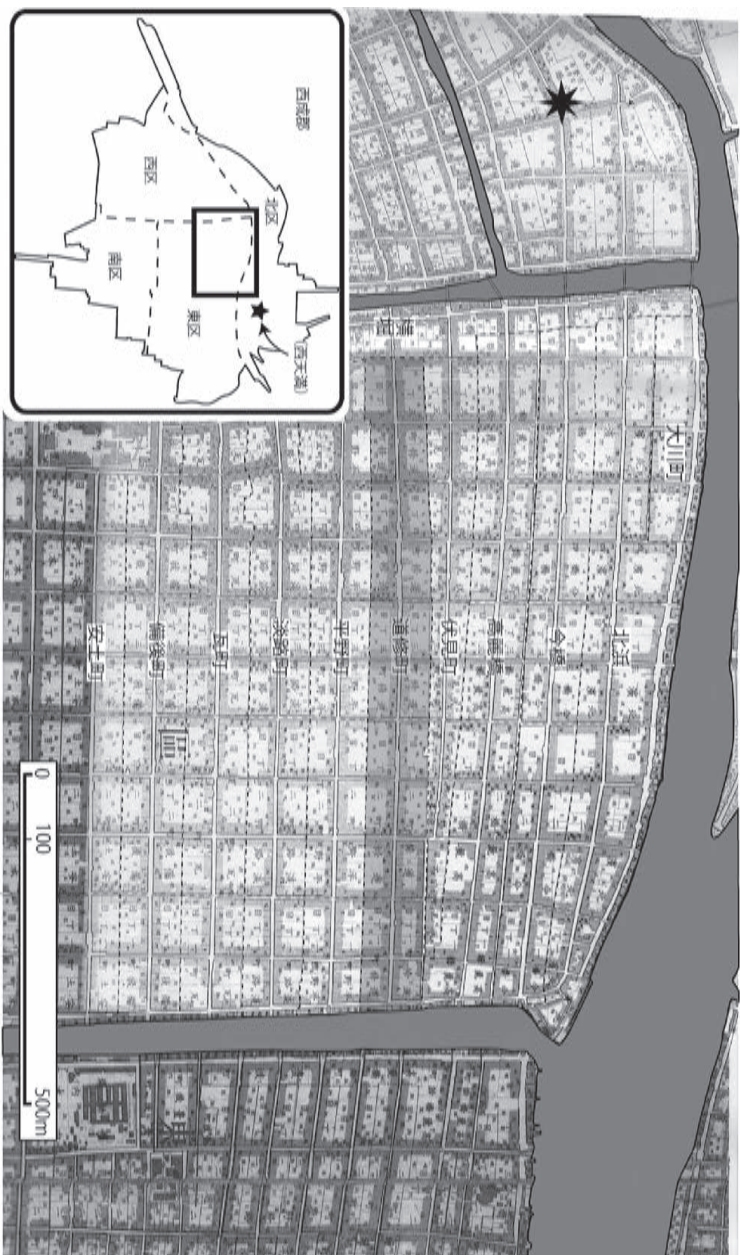


図 1 検討対象地域の概要

れて来たためである。

まず、豊臣秀吉が天正年間（一五七三～九一）に大坂伏見町の土地を加賀の斎藤九郎右衛門に与え、舶来品取り扱いをさせたことに端を発して、周辺で舶来品を扱う商人の集住が見られるようになった。その後、江戸時代になり二代將軍徳川秀忠の命で堺の豪商小西吉右衛門が大坂道修町に移り住んで薬種商を開業したことをきっかけに、舶来品を扱う業者のうち反物を扱うものは伏見町に、唐薬を扱うものが東横堀の平野橋周辺に集住し、後者がしだいに道修町へ移っていったとされる。道修町薬種商の記録としては、明暦四（一六五八）年の似せ薬取締についての文書が最も古く、そこには道修町一丁目を中心に家持人一件、借家人二件、合計三三件の薬種屋の署名捺印がある。また、寛文六（一六六六）年の文書には道修町一～三丁目に一〇八件の薬種屋が存在していたことがうかがえる。

このようにして形成された道修町に薬種商街としての制度的基盤を与えたのは、享保七（一七二二）年の徳川吉宗による道修町一二四件の薬種屋株仲間の公許と和薬改め所の設置である。幕府は享保の改革の一環として全国に特産品の開発を奨励し、当時重要な輸入品となっていた薬種についても国産化の奨励策をとった。この政策的含意については、封建的統治体制に対する引き締め策としての意義もさることながら、国際的な貿易機構への対応という側面も見逃せない。当時の国際的な貿易体制の下で中国における銀への需用が高まり、すでに国内産出の金銀が減少していたため、幕府は金銀の流出を食い止めるべく輸出代替品に銅を用いたが、それも一八世紀には産出量が減少し始めたため、輸入品への支払いに苦慮していた。<sup>15</sup>このため輸入の抑制と輸出の拡大を目指して、従来薬効が認められていなかった国産の薬種を和薬と認定し普及させるべく、江戸・京・大坂に和薬改会所を置き、各地の薬種商に和薬の検査を務めさせたとされている。

この時、大坂では淡路町一丁目に改会所を設け、道修町薬種中買仲間が株仲間として公許され、この任に当たる

こととなった。享保八年、大坂における和薬集荷の独占権を持った二〇件の和薬問屋が定められて和薬改めを行うこととなり、和薬改会所は一旦廃止されたが、この後も唐薬種流通においては道修町薬種中買仲間が中心的な役割を担い続けた。唐薬流通統制上の必要から享保二〇（一七三五）年には組織を強化し、名称も「道修町薬種中買仲間」として追認され、これ以降、仲間株は明治期まで存置されることになる。

宝暦二（一七五二）年に薬種中買仲間は必ず道修町一―三丁目の三町に住むことを義務付けており、居住地の制限が掛けられた。薬種中買株は定員数が決められており、所持者の数は当初一二四名、寛政期以降は一二九名と限られており、株の入れ替わりは相続か別家への譲渡によるものがほとんどで、外部のものが株を入手するのは極めて困難であったとされる。そのため、道修町の外縁部には仲間外の同業者が多数居住していたことも確認されている。

## 第二節 近世日本の唐薬種流通と道修町

次に、以上のような構成員からなる道修町を経由していた近世における薬種の全国的な流通経路を確認する。大坂への薬種の輸送は、和薬の場合は近畿以西の産地からは直接大坂へ送られたため多様な経路がとられたが、唐薬を長崎から大坂へ運送するには、大坂あるいは堺の糸荷廻船によるものが中心でほぼ定まった経路がとられたとされる。これに対して、大坂から各地へ輸送される場合は、江戸へ向かう場合は専ら菱垣廻船により、京伏見へは淀川水運の過書船が利用された。また、羽州秋田など、日本海側各地へは、過書船により川口まで運ばれ本船に積み替えられて瀬戸内海、下関を経由する西廻航路によるものと、逆に淀川を遡上して、大津、琵琶湖、敦賀などを経由する北国廻船によるものがあり、両者が状況に応じて使い分けられた点が指摘されている。<sup>16)</sup>

唐薬種は長崎貿易を通じて基本的に大坂へと移入され、幕府の流通統制と密接に関わっていた。長崎出島に唐



船・蘭船が入港すると長崎奉行の監督下に長崎会所で、江戸・京・大坂・堺・長崎の入札権をもつ輸入業者からなる、五カ所本商人によって入札売買が行われた。落札された唐薬種は、櫃入・筵俵入などの形に荷造りされて、瀬戸内海上を糸荷廻船によって大坂へ送られる。この際、手板と呼ばれる集荷目録には五カ所本商人の代表である宿老の実印が必要となり、これが添えられていないものは抜荷（密輸入品）として処罰された。大坂東横堀沿いの唐薬問屋によって荷受けされた唐薬種は、一部の品を除いて道修町の薬種中買が買い付け、売買価格の決定である値組みと薬種荷物の重量測定である正味廻しが行われた。薬種中買は節季払いで代銀及び問屋口銭を支払い、櫃などから取り出した薬種を小分けして取引先各地に売りさばいた。正味廻しにより全国に通用する各銘柄ごとの平均重量が設定される点、また薬種中買仲間が品質を吟味したことにより信用が付与された点が、近世の薬種流通を円滑にする上で非常に重要であった。唐薬問屋が薬種の相場、すなわち需給関係を見極めて円滑に荷物を流通させること、薬種中買仲間が薬種の品質を見極めて正確に小分けして売りさばくことで各地での流通を円滑にすることを生業の特徴としており、この両者がうまくみ合うことで近世の大坂道修町は薬種流通の全国的要として機能したといえる。<sup>17)</sup>

## 第二章 同業組合の文書資料からみる道修町構成員の変化

### 第一節 道修町文書資料と道修町の制度・組織

道修町の少彦名神社には、明暦四（一六五八）年から昭和十九（一九四四）年に至る期間の株仲間および同業組合の関係資料である道修町文書が保存されている。道修町文書は近世の約三千点および近代の約三万点の文書資料からなり、その内容から薬種商の仲間や組合の運営に関する文書群、崇敬者団体である薬祖講など道修町における薬種業者の信仰に関する文書群、そして道修町の地域的な活動に関する文書群の三つに分類される。

# < 薬種商に関連する名簿史料 >

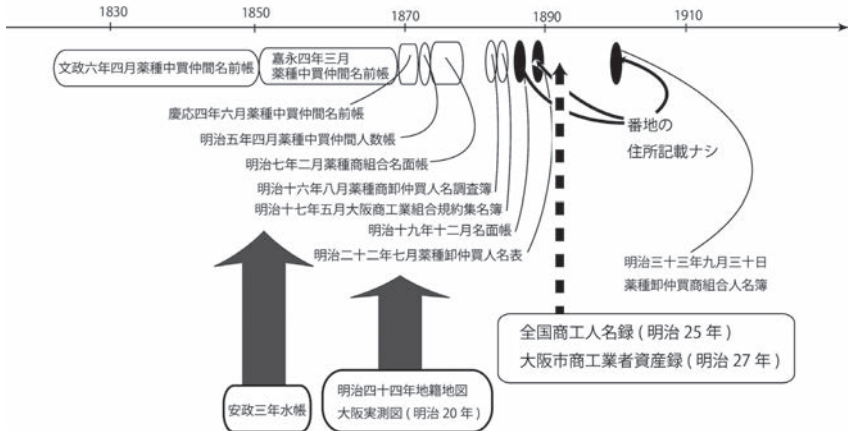


図2 道修町の薬種商に関する名簿資料

道修町文書には、大阪における薬種商の分布の経年変化を知ることができる史料として、薬種中買仲間とその後身である大阪薬種商組合の名簿が含まれている(図2)。まず、次節では文政六(一八二三)年〜明治五(一八七二)年の間の名簿四冊、すなわち「文政六年四月薬種中買仲間名前帳」、「嘉永四年三月薬種中買仲間名前帳」、「慶応四年六月薬種中買仲間人数帳」および「明治五年四月薬種中買仲間人数帳」を用いる。これにより、当該期間の仲間に加盟していた薬種商の道修町内における立地の移動を確認する。この四冊は記載の基準が統一されており、略称または屋号により名簿間で同一業者を特定することが可能であることから、近世から近代への移行期における道修町の薬種商の動向を把握するのに適した資料といえる。

第三節では、さらに明治十六(一八八三)年八月の「薬種商卸仲買人名調査簿」を用いて、約十年後の時点における薬種商の動向を確認する。これには転居の有無や開業や廃業などの加入者の動向を明治十七年五月まで追いかけているので、最終的な明治十七(一八八四)年の状態では三二九名義が確認される<sup>18)</sup>。



## 第二節 幕末～明治初期の大阪における薬種商の立地動向

まず、上述した仲間の名簿四冊の記載内容を水帳<sup>19</sup>、地籍台帳の内容と比定することで仲間加盟者の立地を復原する。異なる名簿間で業者を同定するにあたっては、記載されている屋号および略称を参照した。なお、名簿には中買仲間株一二九名に加え、安政三（一八五六）年以降「薬種中買之内」として組み入れられた神農講加入者四八名が記載されている。薬種中買株の数が固定されていたため、株仲間に加盟できない独立した業者が発生していた。神農講はこれらの業者を含み営業を認めるため寛政三（一七九一）年に組織された団体である。薬種中買仲間は宝暦二（一七五二）年以降、必ず道修町一～三丁目に住居することを義務付けられ、宝暦四（一七五四）年以降、この原則は仲間外の業者である組下にも適用されることとなった<sup>20</sup>。

作業の結果得られた嘉永四（一八五二）年三月から慶応四（一八六八）年六月までの業者の出入りを示したものが図3である。一七七軒のうち八六軒が文政六（一八二三）年から継続して営業しており、そのうち二三軒は家持となっている。当該期間に一〇件の退出が見られるが、そのうち五件が再加入している。部分的な復帰店舗の存在は、「逼塞すれば横町に引っ込んで再起を待つ。盛り返せばまた表通りに出て手広く商売をする<sup>21</sup>」という状況を示しているものといえよう。

また、明治五（一八七二）年までの業者の出入りを示したものが図4になる。一七七軒のうち七九軒が文政六（一八二三）年から継続して営業しており、そのうち二三軒は家持となっている。これにより、長期間存続している店は営業の継続性が高く、家持（地権者）の店舗も比較的变化が少なく存続していることが判明した。また、一筆の中に数多くの業者が営業しており、明らかに店舗の敷地に対して業者の数が多すぎる場所がある。名簿の記載内容からこれらは「借家」または「同居」で営業するものであり、永年奉公した店に間借りしつつ、取引には店舗を必要としない仲買業を営む業者であったと考えられる。



図3 嘉永四年～慶応四年の道修町における薬種商立地の復原

### 第三節 明治中期の大阪における薬種商の立地動向

次に、大阪における薬種商の立地分布の傾向をつかむため、組合名簿のうち加入者の住所が番地まで併記されており立地が特定しうる明治一七（一八八四）年に関して分布を復元したのが図5である。「大阪実測図」を基図にして用い、明治四十四（一九一）年地籍地図を参照することで番地を特定し、経営規模や問屋仲買を区別せず、問屋卸売業者の分布を点描したものである。明治一七（一八八四）年においても、ほとんどの薬種卸仲買商が中心市街部の北船場に位置している。西横堀を中心とする北船場西側への広がりと、堺筋に沿って南区に若干の業者が集中している。ただし、いずれの場合も一〇〇メートル平方に一五軒以上薬種卸仲買商が集中しているのは道修町三丁周辺にしかなく、業者数の数から見たとき道修町への集中度は依然高いままといえる。



図4 慶応四年～明治五年の道修町における薬種商立地の復原

以上のように、幕末から明治中期にかけて、大阪では道修町を中心とした薬種商の集積が維持されており、道修町から薬種商の出入りは見られたものの、その構成員は近世の株仲間に加盟していた家持（土地所有者）の薬種商が一定数を占め続けていた。また、道修町の店舗には多数の薬種商が一筆の敷地内に集中して多数存在する例が見られ、これは永年奉公した使用人が独立した際に元の店に寄宿し続けて仲買人として独立したものと推定される。これらの業者を含め、明治時代の薬種商は道修町に集積を見せつつも、周辺の北船場一円に薬種商の分布を拡大していたことも確認できた。次章では、道修町を中心とする北船場の地域と薬種商の職縁の結びつきについて検討を加える。



図5 明治十七年の大阪における薬種商立地の復原

### 第三章 明治期の道修町における 職縁と地域性

#### 第一節 仲買商の取引仲介と地域制の存続

大阪薬種商組合は大阪中の薬種商に開かれた団体となった。そのため、明治十（一八七七）一八八七）年代を契機に旧来の道修町薬種商は従来からの商慣行を守るため、道修町の内部を「店内」と称して外部と区別し、内部においていくつかのグループを形成する<sup>(22)</sup>。

ここでは野高宏之にならって、このグループを下部組と呼ぶ<sup>(23)</sup>。下部組の詳細については拙著で既に言及したとおり、取り扱い薬種の品目と流通上の業態に応じてそれぞれ異なるものがある。ここでは、前章での検討を踏まえ、道修町内部における薬種・医薬品取引を仲介した仲買商の下部組、すなわち住吉組と地域との結びつきを検討する。

住吉組は明治十三（一八八〇）年に結成された仲買商の組合である。その分布はやはり道修町二、三丁目に集中していた（図6）。なお、明治三十（一八九

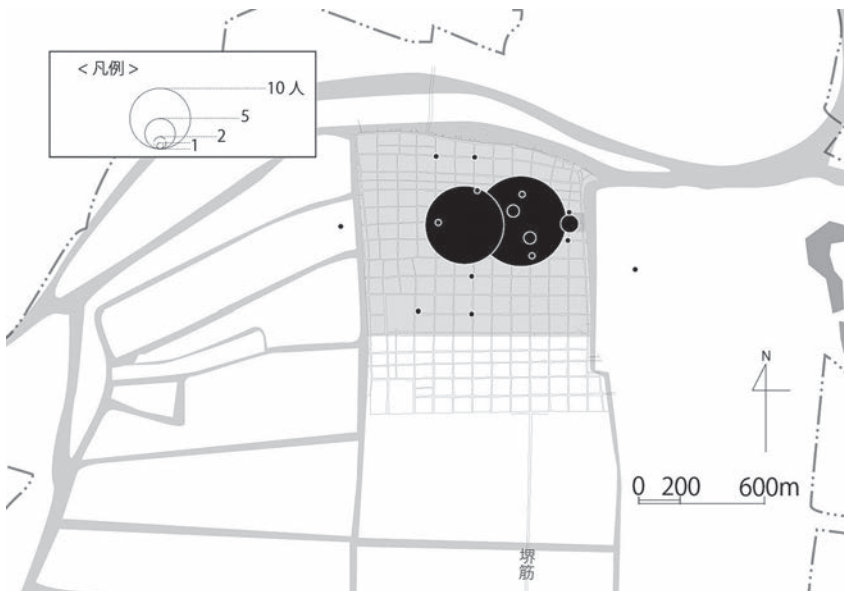


図6 明治十三年における住吉組加盟薬種商の分布

七）年に改正された住吉組の規約には図の網掛けの範囲に居住地制限を課す記述があり、二軒の例外を除いて範囲内に立地していることから規約が効力を発揮していたものと考えられる。なお、この規約には道修町の寄合所で組合総会に遅刻したものには罰金を科す条項が存在し、道修町への近接性が重要視されていたことが明らかである<sup>(26)</sup>。

なお、明治時代には住吉組とは別に「西浜トンビ」と呼ばれた一群の仲買商が存在し、最盛期には一五人ほど存在したとされる。明治時代には未だ、大阪周辺をのぞく遠方の地方からの産物は北国船や九州船により江戸堀、永代浜、西長堀、道頓堀などの川筋に運び込まれていた。これらに混載されて西横堀で水揚げされた薬種を道修町の問屋に仲介する役割はこれら西浜トンビにより果たされた<sup>(27)</sup>。

以上のように、明治期においては、公的に薬種商全体には居住地制限を課すことができないため、道修町で行われる取引を仲介する仲買に限って内部に居住地制限を課し、薬種中買仲間から継承する制度や慣行を維持していたことが判明した。ただし、その範囲は道修町から拡大し、南北は北浜から本町まで、東西は両横堀に限られる北船場の空間的範囲となっていた。次節では、この北船場の空間的範囲が薬種取引の仲介以外にどのような制度や慣行と重なっていたのかを検討する。

## 第二節 北船場と道修町の祭祀

現在に至るまで道修町に医薬品業者を吸引する存在として、少彦名神社の存在が挙げられる。少彦名神社の崇敬者団体である薬祖講は道修町近辺の薬品・医療関係者が加盟しており、例祭である神農祭の運営を担うことで、大阪の薬業関係者を道修町に吸引する役割を果たしている<sup>(28)</sup>とされる。

明治十七（一八八四）年における大阪薬種卸仲買商組合の規約改正に伴い、少彦名神社の維持管理や例祭の経費を組合費から支出することができなくなった。このため、当時の薬種商有志は神社の崇敬者団体を設けて必要経費



の捻出に当たったものとされる。<sup>(29)</sup>

明治二十五年の「薬祖講人名簿」<sup>(30)</sup>をもとに、当時の薬祖講加盟者の分布を復原したものが図7である。薬祖講加盟者は全部で二八九軒隣、そのうち道修町のものが一〇〇軒、北船場内のもので二八三軒となり、道修町を中心とした北船場の業者で占められていることがわかる。さらに、薬祖講の講衆は月掛金の額から一等二五銭、二等一五銭、三等七銭五厘の三等級に分けられ、神農祭の世話係は一等講衆の投票により、毎年半数が改選することと定められた。運営において最も影響力を発揮した一等の講衆は道修町内が二八軒、北船場内で三四軒を占め、少彦名神社の祭祀は道修町を中心とする北船場の薬種商の強い影響下にあったと考えられる。

### 第三節 北船場と道修町の金融

次に、北船場の空間的範囲と重なる道修町を中心とした薬種商の制度として金融制度を取り上げる。円滑な流通のために金融は欠かせない要素といえる。ここでは金融の問題を地域性と結びつけて解決する制度として、大阪の医薬品業者が形成した「横線小切手同盟」を見ていく。道修町の取引決済は、普通二、四、六、八、十、十二月の六節季であったが、節季の受払には特殊な小切手が用いられた。通常節季払いは節季の月末であったが、地方の薬種業者と取引した場合には地元で振り出した手形が大阪に到着するまで時間がかかるので、この時間差を見越して、道修町では「廻り切り」といって翌月の三日まで決済を猶予する慣習が存在した。<sup>(31)</sup>これに関わる手続き上の煩雑さを避けるため、薬種商取締と銀行が協議の結果、明治二十六年には節季渡しに使用する当座小切手の取扱銀行を逸見・木原・川上の私立三銀行に限定し、この三銀行との間で定約書を作成して、組合員には仲間申合盟約への加入を求め、加入者のみに三銀行への節季払の小切手振り出しを制限することを行った。

明治三十五（一九〇二）年の「特殊横線小切手同盟」の盟約書<sup>(32)</sup>には加盟者の姓名を記した人名表が付されている



図7 明治二十五年における奉祖講加盟者の分布

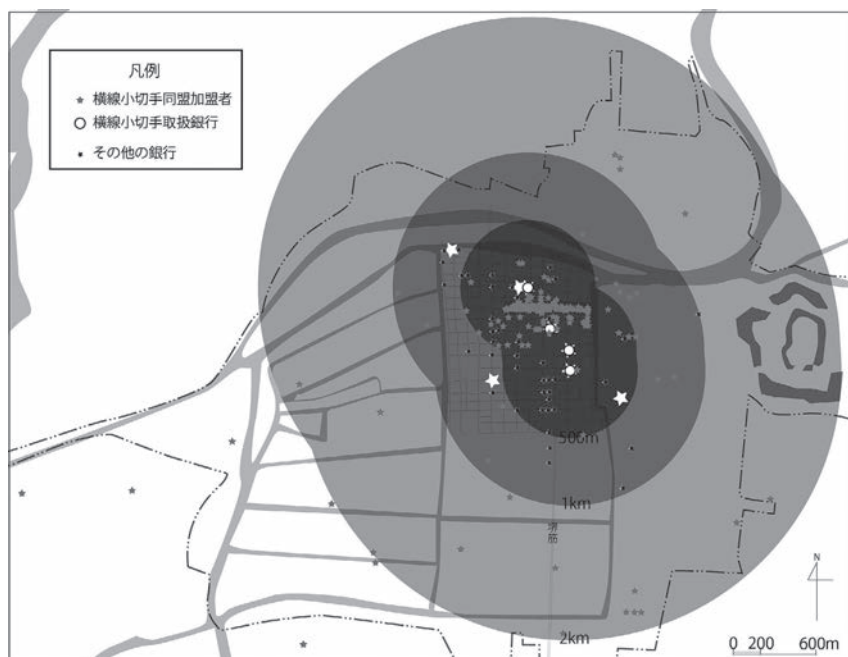


図8 特殊横線小切手同盟加盟者の分布と取扱銀行の立地

のでこれを用い、同年前後における前節でも用いた商工名鑑類を使用して、分布を復元した。さらに、契約銀行である三行の所在と銀行から距離が五〇〇m、一km、二kmの同心円を重ねたものが図8である。二〇五軒の薬種商が加盟しており、住所の追跡ができなかった六軒を除く一九九軒について、一三五軒が五〇〇m圏内に立地し、五〇〇m圏外に分布するものは三五軒、一km圏外に分布するものは二三軒となっている。金融に関するデリケートな問題の交渉が必要になるため、近接性が重要視されたと考えられる。この点をさらに確かめるため、大阪市統計書により明治三十（一八九七）年当時の大阪市東区内における銀行分布を黒星印で表示して重ねた。これにより、道修町に近い銀行が他にも複数存在することがわかる。ただし、横線小切手やその前身の手形、小切手制度は明治二十年前後から存在したと考えられるので、明治二十（一八八七）年以前から存在する銀行を取り上

げ、それを白色の星印で示したところ、道修町の南側に関しては、ほぼ制度の発足当時に、道修町から選ぶうる最近の選択であったことがわかる。また、破綻した逸見銀行の代わりに選ばれた道修町北隣にある第一銀行など、道修町北隣の高麗橋三丁目に位置する二行も明治十年前後から存在していた。また、高麗橋三丁目に立地する第一銀行と三井銀行は東京に本拠を置く銀行の支店である。したがって当初の段階では金融に関するデリケートな交渉を行いうる余地がないと判断され、契約銀行から省かれたものと考えられる。川上、木原、逸見の三行はいずれも明治十年代に設立された個人経営による私立銀行である。明治二十六（一八九三）年に普通銀行条例が施行されるまでは私立銀行を取りしめる法律はなく、相互の契約関係のみにゆだねられていた状態で、個人的な信用の構築は重要な課題になり得たからである。

## V おわりに

以上、本稿では近世の都市中心部にみられた在来的な職縁と地域性の関係が近代にどのように継承され、また変化したのかを考察する視点から、薬種商の同業者町である大阪北船場・道修町を事例とし、同業者町が幕末から明治期に経験した変遷を制度と主体に注目して検討してきた。まず、幕末から明治前期にかけての薬種中買仲間を中心とする薬種商の立地を動態的に復原し、少なくとも明治二十年頃まで近世の株仲間に加盟した薬種商が継続して営業を続けており、そこから独立した新規の業者も道修町にとどまり、取引を仲介する仲買業に進出していたことを確認した。また、彼ら仲買商には明治期になっても居住制限が存在しており、空間的範囲はやや拡大するものの、道修町を中心とした北船場で薬種商の職縁と地域性を結びつけた空間を作り上げていたことも確認された。

さらに、第三章では北船場の中で維持・発展された職縁と地域性の結びつきをより具体的に検証すべく、職縁と結びついた地域の祭祀と金融に関する制度について、加盟者の空間的範囲と照らし合わせて検証した。本稿で得ら

れた知見により、道修町を中心とした北船場では、近世の株仲間によって由来する制度や慣習を継承しつつも、制度の変化や構成員の拡大に対応して、新たに北船場における1km四方の空間に、近接性を重視する職縁と結びついた地域性を形成していたことが明らかになった。すなわち、都市空間において歴史性が重層して形成されることを指摘するものといえよう。

しかしながら、本稿には課題も数多く残されている。同業者町に起居する人は大部分が経営者以外の被雇用者人であり、商家同族団などの「家」に注目する研究からは、従業員をふくめて「家」と見なす場合もある点に注意が必要である<sup>(33)</sup>。また、大正期以降は法人化が進むにつれて雇用形態も変化した。近年の経済地理学研究では、労働者を能動的に空間編成に関わる行為主体性を持った存在として再評価する検討が盛んに行われており、店員<sup>(34)</sup>、手代、番頭、徒弟のキャリア形成や彼らが参加したアソシエーションの活動などに注目した検討が必要となろう。これらについても稿を改めて議論することとしたい。

## 註

- (1) 辻田右左男「同業者町の地理的考察」内田寛一先生還暦祝賀会編『内田寛一先生還暦記念地理学論文集 下巻』一九五二年、帝国書院、三七～五〇頁。
- (2) 谷岡武雄「室町織物問屋街の地理的研究」とくに分布論的に見た家業——立命館大学人文科学研究所紀要五、一九五七年、一九九～二〇二頁。
- (3) 藤本利治『同業者町』一九六三年、雄渾社。
- (4) 三木理史「社会経済史研究と地理学」水内俊雄編『シリーズ〈人文地理学〉8 歴史と空間』朝倉書店、二〇〇六年、九三～一一六頁。
- (5) 今井修平「近世大坂における株仲間と「町」——道修町業種仲間仲間を例として——」朝尾直弘編『町共同体と商人資本に関する総合的研究』（昭和60年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書）京都大学文学部、七～一八頁。
- (6) 武谷嘉之「近世大坂における家作「手伝」職の仲間形成」社会経済史学六五—一、一九九九年、四五～六五頁。
- (7) 井戸田史子「宝暦～天明期における大坂の町と職業集団の構造——北久宝寺町三丁目を中心にして——」ヒストリア一五五、一九九七年、四五～七三頁。
- (8) 吉田伸之『巨大城下町江戸の分節構造』山川出版、二

〇〇〇年

- (9) 宮本又次 1938『株仲間の研究』有斐閣、四三六頁。
- (10) 藤田貞一郎 1935『近代日本同業組合史論』清文堂出版。
- (11) 前掲注10、五九～六一頁。
- (12) 明治後期以降の大坂道修町における医薬品業者の動向や同業者町の変遷については拙著で検討した。網島 聖『同業者町の研究』
- (13) くすりの道修町資料館『企画展示 ■薬種問屋から製薬企業へ（明治期～昭和終戦）■製薬企業の戦後から今（昭和戦後～平成現在）展示パネル集』道修町資料保存会、二〇〇七年、一二頁。
- (14) 渡辺祥子『近世大坂薬種の取引構造と社会集団』清文堂出版、二〇〇六年。
- (15) 真栄平房昭「中世・近世の貿易」桜井英治・中西聡編『新体系日本史12流通経済史』山川出版社、二〇〇二年、三三一～三七八頁。
- (16) 本庄栄治郎監修『武田百八十年史』武田薬品工業社史編集委員会、一九六二年、三九～四一頁。
- (17) 前掲注14、四一二頁。
- (18) 大阪薬種業誌刊行会編『大阪薬種業誌 第三巻』大阪薬種業誌刊行会、一九三七、四七八～五一五頁。
- (19) 矢内昭「船場の町並みあちらこちら—安政水帳などからの復原—」大阪春秋三一、一九八四年、四八～五七頁。
- (20) くすりの道修町資料館『くすりのまち道修町 展示パネル集』道修町資料保存会、一九九七年、二二頁。
- (21) 三島祐一『船場道修町—薬・商い・学の町』和泉書院、二〇〇六年（初出一九九〇年）。
- (22) 田口靖編『道修町』薬業往来社、一九五二年、三～四頁。
- (23) 野高宏之「解題」道修町文書保存会編『道修町文書目録—近代編下巻—』同発行、一九九五年、三〇～三五頁。
- (24) 網島聖『同業者町の研究—同業者の離合集散と互助・統制』清文堂出版、二〇一八年。
- (25) 住吉組の規約中には、住吉組組合員が規定の範囲外に居住する場合は、区域内で居住する確実な引受人二名の連署捺印が必要としている。前掲注22、三四頁。
- (26) 道修町文書史料61067
- (27) 前掲注21、三六～三七頁。
- (28) 野高宏之「解説—近代道修町薬種商組合序説—」道修町文書保存会編『道修町文書目録—近代編下巻—』同発行、一九九五年、二～三頁。
- (29) 明治十七年十月の「薬祖講人名簿 口演」には、設立の目的が以下のように記される。「當薬種商仲間中為繁栄従前集会所内ニ鎮座シ奉ル薬祖神工例年祭禮相當來候處近年來追々隆盛ニ趣タル□全ク當仲間中ノ光栄可為依テ尚向後累年無怠祭典執行可相成様今般更ニ薬祖講ヲ設立シ同商有志衆中ニ謀リ左記ノ通り月掛金ノ法ヲ設ケ□金ヲ以テ毎年祭礼執行致度候」（道修町文書史料801003）。
- (30) 道修町文書史料801002
- (31) 前掲注19、三六～三七頁。
- (32) 大阪薬種業誌刊行会編『大阪薬種業誌 第四巻』大阪薬種業誌刊行会、一九四一年、二五一～二六〇頁。



- (33) 中野卓「同業者街における同族組織」『社会学研究』一  
三、一九四八年、二三～三六頁。
- (34) ①中澤高志『労働の経済地理学』日本経済評論社、二

〇一四年、②湯澤規子『在来産業と家族の地域史——ライ  
フヒストリーからみた小規模家族経営と結城紬生産』古  
今書院、二〇〇九年。